

第94回公開シンポジウム

子どもたちの言葉を豊かに育てたい

◆プレゼンター 山根基世
元NHKアナウンス室長／子どもの言葉を育てる活動

◆パネリスト 小椋たみ子
帝塚山大学現代生活学部こども学科教授・神戸大学名誉教授／
言語・認知発達心理学

◆司 会 一色伸夫
甲南女子大学総合こども学科教授／子どもメディア学

一色：第94回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「子どもたちの言葉を豊かに育てたい」というテーマです。今の子どもたちに是非必要だと思うのは、日々の暮らしの中で人と心を通わせるための言葉です。どんなタイミングでどんな言葉を使えば、人を傷つけず、優しい気持ちで良い関係が結べるか。周囲の人と良い関係を築く言葉の力です。しかし、親や教師以外の大人の言葉を聞く機会のない今の子どもたちには、そういう言葉を学ぶ場がないのです。

今日は、東京から山根基世先生にきていただきました。山根先生は皆さんもご存知だと思いますが、NHKのアナウンサーとしてそしてアナウンサーを統括するアナウンス室長として、言葉の問題の専門家です。山根先生の簡単なお話を申し上げます。早稲田大学を卒業されて、NHKに入局されて、主婦や働く女性を対象とした番組、美術番組、旅番組、ニュース、ラジオ深夜便、NHKスペシャルなど、いろいろな番組のアナウンスをされた方です。そして、女性で初めてのアナウンス室長を歴任された方です。アナウンサーは全国で500人いる中で、その中のトップである室長をされていたのです。退職後は、子どもたちの言葉を育てるためにいろいろなことをされています。朗読会とか読み聞かせや教材の開発など、放送で培った様々なことを通して活動されています。著書としては、「言葉で私を育てる」「今子どもが危ない、子どもを救う言葉の力」などがございます。

それから、山根先生のお話の後、発達心理の小椋先生にコメントをいただきます。小椋先生は、帝塚山大学現代生活学部こども学科教授です。元、神戸大学の名誉教授で、本学には非常勤講師としてきていただいております。京都大学大学院文学研究科博士課程博士、ワシントン州立大学客員研究員、島根大学、神戸大学を経て現職です。専門は言語、認知発達心理学です。ご著書には「初期言語発達と認知発達の関係」「よくわかる言語発達」「新子どもたちの言語獲得」などがございます。

では、山根先生、お願いいたします。

山根：こんにちは。今日は学生さんだけかと思ったら、威風堂々とした私とほぼ同年齢の方にもおいでいただいて少し緊張しております。今、一色先生からご紹介いただきましたように、私は、NHKに36年もおりました。一色先生とはNHK時代によく存じあげておまして、そういう関係で今日はこちらに伺いました。今ご紹介いただきましたように私は36年間アナウンサーとして仕事をした後、2007年から子どもの言葉を育てるという活動に取り組んできました。なぜ、一アナウンサーとして仕事をしてきた者が、その仕事の後、子どもの言葉を育てる活動に取り組んだのか、不思議じゃありませんか。なぜと思われる方もいると思います。私は、今紹介していただいたようにNHKの最後の2年間は、アナウンス室長という立場になりました。その頃、NHKで不祥事があって、NHKの受信料収入が落ちていました。信頼回復のために何が必要かということを考えて、アナウンサーにできる社会貢献は何かと考えた時に、やはり子どもの言葉を育てるということをNHKは全国54局あるので、その全国津々浦々のアナウンサーがそれぞれの地域でその土地の子どもたちの言葉を育てるという活動に取り組めば信頼回復に繋がるのではないかと考えました。では、なぜその時点でそういうことを考えたのかということ、今もそうですが、その当時子どもたちの不可解な事件がたくさん起こっていました。一瞬の激情に駆られて取り返しのつかない事件を引き起こして、自分も不幸になるし、周囲も不幸に陥れるというような事件が相次いで起こりました。なぜ、そのようなことが起こるのか。探っていくといろいろな社会的な背景があります。一つには絞れませんが、いろいろな原因の一つとして挙げられるのが、子どもたちの言葉の力の欠落です。例えば、自分の気持ちを表現できない。これはとても苦しいことです。

皆さん覚えがありませんか。自分の胸の中にマグマのように渦巻く思いがあるのに、それが言葉にならない。もどかしい、どうしていいのかわからない。これは、とても苦しいことです。そのような自分の内面を言語化する力がないということは、その子にとって辛いことであり苦しいことである。そういうもどかしさの中で苛立って、つい暴力を振るう。もう一つは周囲の人と言葉によっていい人間関係を築く力がない。今の子どもたちのボキャブラリーは限られています。「ばーか」「死ね」「うざい」そのようなことしかボキャブラリーがない。

言葉というのは、鏡のようなものですから、自分がそのような言葉を吐けば、相手からもそのような言葉しかきません。自分が言ったにも関わらず、相手からも「ばか」「死ね」「うざい」と言われて、孤独感に陥る。非常に世間をうらむような感情が湧いてくる。そういう思いの中で、つい手を出してしまうというようなことが起こる。文部科学省が発表する小中高校生の問題行動調査があるのですが、これは2009年の調査ですが、年間暴力行為というのが6万件を超えている。これは過去最多といわれていました。これは、私が活動を始めて2年目のことでした。それぐらい、子どもたちが非常に心理的に不安定な状態に置かれて、つつい暴力を振るってしまう子どもが多くなっていた。

その背後に言葉の問題があるとすれば、私たちNHKのアナウンサーには、何か果たすべき役割があるのではないかと自負しています。曲がりなりにも日本の話言葉を担ってきた集団ではないかと自負しています。世間からはいろいろとお叱りを受けながらですが、NHKのアナウンサーのくせにアクセントが違うとか鼻濁音がでないとか、言葉遣いが悪いとか、間違っただけということと大喜びでお電話をしてくださる方がたくさ

んいらっしゃいます。そういうお叱りを受けながらも、放送開始以来 80 年以上、日本の話言葉を担って突っ走ってきた集団です。それなりに話言葉については、ノウハウを積み重ねているわけです。ですから、私たちは定年退職後そういった、NHKの中で積み重ねてきた話言葉のノウハウを、社会還元しようではないかと考えたわけです。ちょうど私と同じ時期に定年退職したアナウンサーたち、広瀬修子さん、宮本隆治さん、松平定知さんというグループで、子どもの言葉を育てる活動を始めました。

では、具体的にどのような内容の活動をしているのか。大きく分けて2つあります。「音声言語」に親しんでもらうということと、「日常の話言葉」の教育ということです。音声言語というと堅苦しく聞こえますけれども、要するに絵本の読み語り、朗読会、朗読アーカイブ等をしました。日本では、万葉の昔から文字によって記録されたすばらしい文学作品がありますが、これを我々は、人間の肉声で記録していこうということで、古い文学作品を私たちが朗読して、それを記録していく朗読アーカイブにも力を入れました。朗読会も全国各地で開きました。そして、みなさんは、絵本の読み聞かせとおっしゃっていると思いますが、私たちは読み語りという言い方をしています。というのは、皆さんご存知でしょうか。子ども学を専攻しているのでご存知かと思いますが、大田堯という教育学者がいらっしゃいます。今 96 歳でまだ矍鑠とされていて、私も教育のことで悩むと直接お電話をして相談させていただいています。東京大学の教授でしたが、その後都留文科大学の総長を務め、今もなお、教育界に発言をされている先生です。先生はおっしゃるんです。教育の場においては、どうも使役動詞がよく使われる。勉強させる、遊ばせる、絵を描かせるという使役動詞。読みきかせも、「聞かせる」というと押しつける感じがする。けれども教育というのは、本質的には、その子自身が持っているものを引き出すこと。人間というのは生まれた時からその子自身の細胞の中に、すばらしい遺伝子、設計図を持っている。その設計図通りの、その子らしさを花開かせるために、スイッチを入れてあげるだけでいいのだ。それが教育なのだということをおっしゃっています。そういう意味で、先生が関わっていらっしゃる広島県の図書館では、読み語りという言い方をしていました。語るという言葉は、本来、関わるという意味があるのです。これは民俗学者の柳田國男が言っているのですが、語るという言葉には関わるという意味が含まれている、そこで私たちは、絵本を読み語ることによって、その子どもたちの成長に関わっていきますという意味を表明するという意味で、絵本の「読み語り」を続けています。

なぜ、音声言語というもの、朗読とか読み語りが大切なのか。私たちはなぜそれを大切に活動しているのかということですが、皆、今平気で日常会話をしています。声を出している。でも、生まれた時は「おぎゃー」しか言えなかったのです。それが、いつの間に生意気な口がきけるようになったのでしょうか。どこかで習ったのでしょうか。学校で教えてもらいましたか。親から「声はこうやってだすのよ」とか「喋る時は口をこうして動かすのよ」と教えてもらったことはありますか。殆ど誰もないと思います。いつの間にかできるようになっている。だから何でもなし誰でもできることだと思っているかもしれないけれども、では、声のでる仕組みを知っていますか。知っている人いますか。この辺りに声帯があるのは知っていますね。では、声帯というのは、どういうものか知っていますか。声帯というのは、唇のような肉片がこの辺りに縦になって、そこに肺から吸った息を吐いて、その声帯を震わせて、その振動が音になって声になっていくのです。けれども、ただ肺から吸って吐いた息を声帯に当てただけでは、とても人に

聞こえる声にはならないのです。

どうやって人に聞こえる声にしているのかというと、実は、皆、すごいことをしています。腹腔、胸郭、口腔、鼻腔、頭蓋、この辺りの空間を上手に共鳴させて人に伝わる声にしているのです。これは本当はとても難しいことです。しかも、これを言葉にするためには、唇と舌の動きというのが同じきちんとしたタイミングで合わなければ言葉にはなりません。口、鼻から吸った息を肺から噴出して、声帯を震わせて、その時言葉にすると、唇と舌の動きがきちんと同じタイミングで動いて、それを上手に共鳴させるというこれは、とても難しい。この仕組みを知ったら、神様がいらっしやるとしか思えないぐらい、神秘的な力です。皆何でもないように思っているかもしれませんが、これは、ロケットの発射よりもっと厳密なタイミングが求められます。だから、この仕組みを知ったら、本当に声を出して喋ることができるのは、奇跡のように思えてくる。そういうことです。

では、あなた方は、そのような難しい技術をいつ身につけたのでしょうか。生まれた時は「おぎゃー」としか言えなかったのに、なぜ、いつの間に喋るようになったのか。これは、気づかないうちに、周囲の大人たちの言葉を聞くことによって、学習しているのです。人間という動物は、とても特殊な動物で、他の犬や猫やヤギは生まれた時から同じ声で同じように仲間とコミュニケーションができます。犬は生まれた時から「ワン」と鳴き、猫は生まれた時から「ニャー」と鳴き、羊は生まれた時から「メー」と鳴く。それで仲間同士のコミュニケーションができます。生まれた時は「ニャー」と鳴いていたのに、大きくなると「ワン」と鳴く犬を聞いたことはありますか。でも、人間を含む3種類の哺乳類と、鶯とかひばりなどいい声で鳴く鳴禽類と呼ばれる鳥たち。その3種類の鳥と3種類の哺乳類は、生まれた後、後天的に学習しなければ決して言葉を獲得することができない動物です。だから、鶯は春先は生まれたばかりのときは「ちっ、ちっ」とか「ケキョ、ケキョ」としか鳴けません。でも春が深まって、周囲の大人たちの鳴き方をきちんと勉強していくと段々と「ホーホケキョ」と上手に鳴けるようになります。これは学習したからです。ですから周囲のそのように鳴く大人の鶯がいなければ、その鶯はきちんと鳴き方を勉強することができないのです。

人間も同じです。人間は生まれてから8歳ぐらいまでは、言語形成期で、言葉を獲得する時期ですが、その間に周囲の人の言葉を聞かない限り言葉を獲得することもできなければ、人間としての声の出し方も獲得できないのです。だから、1920年、インドの山奥で狼に育てられた少女が発見されました。2人いたのですが、推定年齢が下の子が2歳、上の子が8歳ぐらい、下の子どもはすぐに亡くなりますが、上の子どもは牧師さんの夫妻に引き取られて、大切に育てられますが、10年生きて、17,18歳でなくなります。この子はどうしても、人間の言葉を発することができなかつた。言語形成期に狼に育てられていたので、狼としての声の出し方とか、狼として優れた山を渉猟する力とかそういうことは脳のシナプスがつながっているけれども、人間としての声の出し方、人間としての言葉は生涯獲得することができなかつた。ですから、言語形成期の間に周囲の大人の言葉を聞いておくというのが、いかに大切なことなのか。それを聞かなければ、私たちは言葉を獲得することはできません。皆さん、家族で、お母さんと娘さんがそっくりな声を出したり、電話にでると、お父さんと息子さんの声を間違えたりします。もちろん、それは、骨格とか遺伝的な物理的な形が相似しているということもありますが、毎日、暮ら

しの中でお父さん、お母さんの喋り方とか声の出し方を見ているわけだから、それを見て成長していくので、そのように学習して親とそっくりな声の出し方、喋り方になっていくのです。

だから、その時期に大人が子どもたちに与える影響はとても大きいのです。大変重い責任があるのです。私たち、子どもの言葉を育てる活動中で、読み語りとか朗読をするのは、やはり幼い心に、日本語の美しいリズム、日本語の美しい響きそして人間の肉声のぬくもり、そのようなものを幼い心に刻み込んでおきたい。それが、生涯その子どもの言葉、生涯を支える言葉になっていくのです。そういうことで私たちは、音声言語というものをたいへん大切にして活動しているわけです。

活動のもう一つの柱が、話言葉の教育ということを申し上げました。今、学校の教育というのは、もちろん話言葉の大切さに気づいて、いろいろな教育をしています。私も現場をいろいろと歩いてみると、やはり今でも学校の国語教育では、読み書きが中心です。話言葉について教えている授業を見ても、概ねは皆の前でスピーチをする、或いは何か調べてきたことを前に出てレポートする。或いは、わざわざ犬派か猫派かと対立点を作ってディスカッションする、ディベートする。所謂パブリックスピーキング、公の場での話し言葉は大変教育に力が入っていて、そういう授業はとでも進んでいます。小学校4年生ぐらいの子どもが立派なレポートをするのです。NHKのアナウンサーにスカウトしようかと思うぐらい立派なレポートをする子どももいます。だけど、今の子どもたちにどうしても必要な、切実に求められる言葉の力というのは、そういうパブリックな言葉ではなくて、日々の暮らしの中でとなりの人と心を通わせるための言葉ではないかと、私は思うのです。

そういう日々の暮らしの中の言葉。ハレの日の言葉ではなくて、ケの日、日常の言葉使いというのが身についていない。そういうものを学ぶ場がないのです。というのは、今は、概ね家族でお父さんが仕事に行っていますから、母と子になります。母と子の関係には言葉など要りません。お腹がすいた頃にはご飯が出てくる。のどが渴けばジュースと言えばジュースが出てくる。主語述語を整える必要もない、「てにをは」がくるっていても何も言われない。お母さんが今どんな気持ちだろうか、相手の気持ちを忖度する必要もない。母のほうが付度してくれる。そのような関係だと、家庭は、子どもの言葉を育てる場ではありえないのです。では学校ではどうか。先ほど言いましたように、パブリックスピーキングは教えるけれども、日々の話言葉までには、手が回らない。今の先生は大変です。小・中・高校の先生は、昔に比べて提出しなければならぬ書類が10倍ぐらいあるとも聞いています。それに1本、モンスターから電話がかかってくればもう1時間、2時間あっという間に過ぎます。私は、昔の先生が持っていて、今の先生が失っているものは、誇りと時間だと思っています。先生たちに誇りを取り戻していただきたい。そして教育とは何か。子どもを育てるということは、何をすべきなのか。教育についてじっくり考えていただく時間を差し上げたいと思っています。誇りを取り戻し、教育について考えたいいただく時間を差し上げたい、それくらい今大変だと思います。ですから、学校に日常の話言葉の教育を求めるのは、無理なのです。でも、結局そういう日常の話言葉によって、その子どもの人生が変わってくるのです。

例えば、「ありがとう」「ごめんなさい」これをきちんと然るべき相手に然るべきタイミングで、然るべき表現で言えるかどうかで人生は変わってきます。7年ぐらい前になりますが、東京渋谷の歯医者さんの家で起きた事件、覚えていらっしゃるでしょうか。ご両親が歯医者さんで、子どもが3人いました。一番

上の子どもは歯科医を目指して、医大に行っている。真ん中の男の子は大学にすべって浪人中。下の娘は女優を目指して毎日楽しく劇団に通っているという家族です。ある日、下の娘さんが、浪人中のお兄さんに向かって「あなたには夢がないから駄目なのよ」とののしった。その言葉に逆上したお兄さんは妹に手をかけ、しかもばらばらにしてしまうという非常に衝撃的な事件がありました。その事件の後、お母さんの談話が新聞に載りました。「あの子（下の娘）は、ごめんなさいと言えない子どもでした。あの子がきちんとごめんなさいを言えさえすれば、こんなことにはならなかった。」とお母さんが言っていました。お母さん、あなたがこの子にきちんとごめんなさいを言えるような子どもに育ててあげるべきでしたねと思います。

やはり、人間が生きていく上での基本のき、人を傷つけてはいけません。傷つけたと思ったらきちんと謝りなさい。この基本ができなければ、その子自身が幸せな人生を生きることができないのです。隣の人と心を通わせるための言葉の力というのは、その子が自分らしい人生を切り開いていく上で、どうしても必要な人間力としての言葉の力なのです。この人間力としての言葉の力がなければ、自分らしい人生を切り開いていけないのだということを幼い内にきちんとわかってもらえるような、言葉教育をしていかなければいけないと思います。ところが、今申し上げたように、学校も家庭もそういうことを教えることができない。そういう教育力を失っているのです。

何が問題かということ、私が今一番問題だと思うのは、地域社会の崩壊です。昔は、少々家の中でお父さん、お母さんが忙しくて子どもを看られなくても、近所のおじさんおばさんたちが、何かと子どもを構っていてくれました。でも、今地域のつながりがなくなってきた。だから、子どもの言葉を育てるといふ活動を続けていく中で、これはもう学校と家庭だけを当てにしている駄目だ、地域の新しいつながりを結び直す中で子どもの言葉を育てていくしかない、地域づくりと組み合わせやていれないといけなと気がつきました。昔、地域社会がまだ活きている頃は、冠婚葬祭、その都度皆地域の人が集まっていた。昨日今日生まれた赤ちゃんから、おじいちゃん、おばあちゃん、曾じいちゃん、曾ばあちゃんまでが、一同に会してお葬式を出したり、結婚式をしたり、お祭りをしたりしていました。そういう時に子どもたちは大人の振る舞い方をじっと見るのです。こういうずるいこともするのだと、人間を勉強していくのです。あのような時はあのように振舞うのだとか、こんな立派な人もいるのだという、いろいろな人間がいるということ、そういう場で学んでいた。

言葉を学ぶということは、人間を学ぶことが必要なわけです。例えば、家のお母さんは、おじいちゃんがいる間は、おばちゃんに対して丁寧語を使っているが、おじいちゃんがいなくなった途端に、ため語になった、つまり、人間の関係と言葉がセットになっている、言葉というのは、人間の関係によって動くのだということも、そういう場で学んでいた。今、そういう場がないのです。だから、そういう場を作っていく。その中で子どもの言葉を育てていきたいというのが私の願いです。これを私は、ずっとその思いを遂げられる場所を探っていました。このような話をする、それはすばらしいアイデアですね、是非やってくださいとおっしゃるのですが、では、予算をつけましょうという方がなかなか居なくて、ようやく、去年、愛知県の半田市、ここは、童話作家の新見南吉の「ごんぎつね」、これは小学校4年生の教科書に載っていますが、この新見南吉の生まれた場所です。ここには、新見南吉記念館があり

まして、これは、半田市の運営なのですが、ここで、去年、新見南吉生誕 100 年の記念行事の予算があったのです。私たち、「ことばの杜」という名前で、子どもの言葉を育てる活動を続けていたので、私たち、先ほど申し上げたメンバーのところに、この記念行事として朗読に来てくださいというお話がありました。私は渡りに船とばかり、すぐに記念館に駆けつけて、地域のつながりを取り戻すことと、子どもの言葉を育てることを併せてやりませんか。ただ朗読をするだけではなくて、地域の中で子どもの言葉を育てるということと組み合わせると朗読会をしませんかという持ちかけをしましたら、すぐに乗ってくれました。そして去年は、7月27日に半田の雁宿ホールといって1300人入るホールがありますが、そこで、子どもたちが新見南吉の「ごんぎつね」を朗読することを決めて、半年かけて勉強しました。半田市には13の小学校があります。それぞれの学校から児童を2人ずつ出してもらいました。それから、異年齢のさまざまな人々の様々な言葉を聞くということが、子どもの言葉を育てる上で何よりも必要だと思っていましたので、大人にも入ってもらいました。半田市には、30年以上続いている朗読の勉強会「きりんの会」というのがありました。その中からできるだけ、年代がまちまちの人を出してもらって20代から70代までの人、それから学校の先生にも2人入ってもらって、計34人で、「みんなでごんぎつねプロジェクト」という名前でそのプロジェクトをスタートさせました。

キックオフは1月の終わり頃。子どもたちとその父母たち、先生方、きりんの会の関係者、それから子どもの言葉を育てることに関心のある市民の皆さんに集まっていたいて趣旨を説明させていただきました。

今は、親と学校の先生以外の大人の言葉を聞く機会のない子どもたちに、できるだけいろいろな立場のいろいろな人の言葉を聞いてもらう場にしたい。もちろん朗読会で、うまく朗読をすることも一つの目的ですが、それだけが目的ではない、むしろ毎回、毎月2回ずつ半田市に通って、月2回朗読指導をしました。まず最初にオリエンテーションで趣旨を説明した上で、2回ずつ通って、皆を5,6人のグループに分けて勉強をします。なるべく、年齢が1年生から70歳までがそれぞれのグループに入るような工夫をして、なるべく異年齢が触れ合えるようなグループ分けをして勉強をしていきました。

最初は、「ごんぎつね」を読み込んでいく。言葉の意味から調べていきます。分からない言葉はないか。今の子どもは「川辺」というのも分かりませんでした。1年生と6年生が分からないのは違いますし、では、1年生の子どもが「川辺」が分からないというと、分かる人と聞くと、「はい」と手を挙げて4年生の女の子がホワイトボードに黒いマジックで川の絵を描いて、赤で端をなぞってここよと教えるのです。そのようにして、分からない言葉を全部網羅して、洗い出して、分かる人が説明していく。「もず」という言葉がでてくるのですが、これを分からない人がいます。ここで3年生男の子が「はい」といって「鳥」と答えました。「では、どれぐらいの大きさ、どんな色、どんな声で鳴くの」と聞くと、大人もわからない。そういうことは宿題にして調べてくる。5年生くらいになると結構生意気な子がいて、ある男の子が私のところに来て、「何だよ、これは、意味を調べているだけじゃないか」と言うのです。そこで「音読と朗読は全然違うのよ。音読というのは、ここに書いている文字を音にするだけなら音読、それは文字の読める人なら誰でもできる。意味が分からなくてもできる。でも朗読は、全部、意味を分かって、そして自分の身体の中に入れて、それを聞いている人の耳に届けるのではなくて、心に届けるの。心に届

けようと思ったら全部意味が分かって、自分の中にきちんとイメージが描けなければ伝えることはできないよ」と言うと、その生意気な子が「ふうーん」って、神妙な顔をして聞くのです。60代の私と小学校4年生の男の子がそういう会話をするということが、いろいろな意味で長い目でみるといつかその子どもの言葉になっていくのではないかと思うわけです。

そういう形で遠足もしました。「ごんぎつね」の舞台になったところを全部歩いて、こういう光を受けて、こういう風を受けて、こういう匂いを嗅いで、こういう風景の中で、この物語が生まれた。赤い井戸というのが出てきますが、あの辺りは、常滑焼の井戸を使っているのです。貧しい家はその常滑焼の井戸を使っている。赤い井戸というのはこれですよときちんと手で触ってもらって、全部五感で物語を理解し、身体の中に入れて、7月27日、34人が打ち揃って、見事に朗読をしてくれました。私はこれで、地域づくりと子どもの言葉を育てることを組み合わせた活動の一つの原型ができたと思って、これでこたばの杜を解散することにしました。そして今は一人で、半田方式を伝える伝道師になっています。

では、私は、このような活動を通して、結局どういう子どもたちを育てようとしているのか。子どもの言葉を育てるといって、皆さん、大体、「是非NHKさんががんばってください」「美しい日本語を守ってください」「正しい日本語を伝えてください」と仰る方が多いです。もちろんそれも大切なことですが、私が思う、子どもの言葉を育てる目的は、先ほどから申しあげているように、自分の気持ちを言葉で表現できること。そして、相手の言葉を聞くことによって、その心を理解できる。そうやって相互コミュニケーションができる。そのことは、これからの人生を生きていくことに、一人でできることは何もない。何か一つ志を持って、何か成し遂げたいと思うとき、必ず、いい人間関係を築く力というのが求められる。そういう言葉の力を持ってもらいたい。

それから、私は、日本のオバマを育てたいと思っています。オバマさんという人は、まだまだ大統領候補として名も知られない時に、アメリカ全国を歩いて、全然無気力で、政治に関心のなかった子どもたちに一人ひとり話しかけていく。世の中こんなものだ斜に構えて、冷笑しているのは、簡単なことだ。でもそうではない。皆で力を合わせれば、世の中を変えることができるのだ。「変えることができる」と信じよう」と呼びかけた。皆の一人ひとりの心に明かりを灯して行って、彼らが一人ひとりが目覚めて行って「そうだ、力を合わせれば世の中を変えることができるのだ」と信じて立ち上がった。彼が集めた選挙資金は6億4千万ドルと言われています。90%以上が小口のネット献金、100ドル以下の小さなお金。貧しい学生たちが5ドル、10ドル、100ドルと出したお金が積み重なって、彼をあそこまで押し上げていった。つまり、彼は、言葉で語りかけることによって、世の中を変えることができると信じているわけです。

言葉によって世の中を変えることもはできるのです。武器によらず、戦争によらず、言葉によって世の中を変えることはできるのです。そのことを信じて欲しい。言葉というものにそれだけの力があるということを感じる子どもを育てるといのが民主主義の何よりも大事な第一歩だと思っています。その時に何が大事かという、最終的に私が目指しているのは、自分の目でものを見て、自分の頭で考えた、自分の言葉を語る子どもを育てること。正しい日本語であろうと美しい日本語だろうと、自分で考えた自分の言葉でなければ意味はありません。どんな美しい言葉を喋っても、それは絵空事です。自分の

言葉というのは、自分の頭で考えた自分の思いを言語化できる力、自分の頭で考えること。新聞やテレビが言っているからとそういう情報を鵜呑みにしないこと。権威ある人が言っていることを鵜呑みにしないこと。本当にそうなのかときちんと疑う力を持つこと。そうやって自分で獲得した自分の言葉を語る人になって欲しい。そういう人が日本中に溢れた時、日本は本当に平和な誰もが自分らしい人生を全うできる世の中になると私は信じています。

そういうことで、子どもたちを育てる活動をこれからも続けていきたいと思っています。以上です。

一色：どうもありがとうございました。山根先生からとても素晴らしいレクチャーをいただきました。子どもの言葉の欠落ということが今起こっているところから日々の暮らしの中での言葉。話言葉が不足している。言葉を学ぶとは人間を学ぶことであるということと、最後には、自分で考え、自分の言葉を作る。そういったことが非常に大切であるということでした。

では、今の山根先生の基調講演に対して、コメントを小椋先生からいただきます。小椋先生よろしくお願いたします。

小椋：山根先生、ありがとうございました。素晴らしいお話を聞かせていただいて、私がコメントをするのはとてもおこがましい感じがいたします。私自身は、皆さんが勉強しておられるのと同じような保育者を育てるところに5年前に移り、皆さんも多分1回生の時に履修された保育内容（言葉）を教えています。その時に使うスライドを使い（事前にお送りしたところ、一色先生から難しすぎるのではといわれたのですが）、今、山根先生がご講演されたことに関連したお話をいたします。

私自身は、だいたい9ヶ月ぐらいから2歳半ぐらいの子どもが言葉を獲得していく過程について、研究をしています。今、山根先生が言葉というのが大事であると言われました。まず、皆さん、講義で学習されていると思いますが、ことばの役割についてお話しします。

言葉というのは、一つは人とのやりとりに使う、コミュニケーションの手段であるということです。コミュニケーションの手段というのは、知識、情報だけではなくて、いろいろな感情とか気持ちのやりとりの手段として使うことです。次に、言葉というのは、考えるということと非常に関係しています。言葉で考えるという力を子どもは身につけていきます。物事を考える時に、言葉で考える。思考の主要な手段とか様式となるということです。コップと言ってもいろいろなコップがあって、それにラベルがつく。一般的なラベルと同時に、それぞれの思いのようなものも入っているわけで、内包、外延、それぞれの個人の意味などもあるのですが、そういう言葉によって、一定のカテゴリーで考えたり、推理したり、結論を出したりするということで、考える時に、使います。

第3の役割は自己の行為や活動を調整するために言葉は大きな役割を果たします。言葉で伝えられない、言葉が不足しているために、自分の行動を抑制することができないことが起こります。先ほど山根先生のお話しにでてきた歯科医師の子どもの事件でも、言葉で行動を抑制する力が弱かったのだと思います。コミュニケーションとして使っていた言葉が自分の中に内化されて、自分の行動を抑制する

という力になっていく。例えば、私たちが自動車学校で運転を習っている時に、外から言われていた言葉が内化され、自分で行動をコントロールすることができるようになります。

第4の言葉の役割は自分のいろいろな気持ちを表現する手段としての役割です。第5の言葉の役割は、自我の形成としての役割です。私たちは日本語を獲得していますが、日本語というものに規定されたものの考え方をしています。日本語は主語や目的語が落とされることが多いです。英語圏ではそのようなことはなく、必ず主語があります。‘I’を主張する言語です。日本人は英語圏の人に比べると自己主張が弱いですが、言語構造が関係しているともいわれています。このように言葉が自我の形成に大きな役割をはたしているといえます。言葉というものは、人間だけが獲得できるもので、このような重要な役割を果たしているといえます。

先ほど、山根先生のご講演で狼に育てられた兄弟の例がありました。最近、ルーマニアの捨て子の研究が沢山、報告されています。国力の成長のために1966年に中絶が禁止され、5人以下の子どもの家族に税金を課すということが行われ、養育不能に陥った家庭の17万人の子どもが捨てられ、その子どもたちについての研究がアメリカのチームにより行われ、その結果が最近、報告されています。いつ、養子、里子に出されたのかということで、その後の発達が変わってきます。また、書き言葉の発達にも影響を及ぼすということが報告されています。スライド1はルーマニアの孤児院です。スライド2は世界中の各国の家庭に養子縁組された子どもたちです。



スライド1 ルーマニアの孤児院



スライド2 世界中の各国の家庭に養子縁組された子どもたち

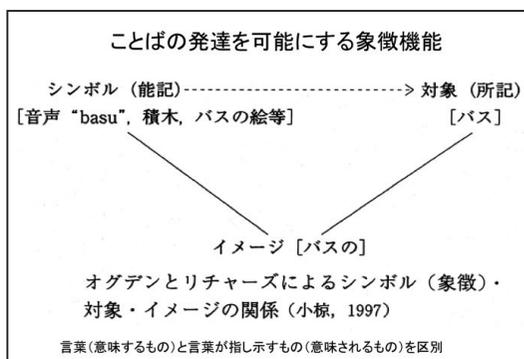
ある研究では1歳3カ月までに里子に出された子どもは、コミュニティで育った子どもと同じように言葉の遅れがなかった。2歳以降に里子に出された子どもは施設でずっと養育された子どもと同じように言語遅滞がありました。15カ月から24カ月ぐらいに里子に出された子どもは大きな改善があったという結果でした。

それともう一つの研究では、8歳時点の書き言葉についても、1歳3カ月前に里子に出されて、そして、人間的な環境で育てられた子どもの場合には、遅れがなかった。けれども、2歳以降の子どもはやはり書き言葉のところで、遅れがあるということでした。先ほども述べましたが、0歳から1歳3カ月ぐらいの時期というのが非常に大事であるということです。私はこの年齢辺りの言語発達を研究しているのですが、1歳3カ月は、日本の子どもの言葉の発達の標準では、語を3語くらい言う時期です。皆さんも新版K式発達検査を習われたと思いますが、この発達検査の1歳3カ月から1歳6カ月の検査項目に

「語彙3語」の項目があります。1歳3カ月までの時期というのが、非常に子どもの言葉の発達にとっては、大事であるということです。皆さんも保育士になられて、子どもに話しかけてあげるとというのが、とても大事であるということがよく分かると思います。言葉を獲得するには、人を介して物とかかわる「大人-物-子ども」の三項関係ができていないことが必須です。自閉的な子どもは、この三項関係のところがない。人と養育者と一緒にものを眺めたり、ものをわたしたり、養育者が指差した方向を見たり、子どもが指差ししたり、身振りでのやりとりが大事です。人間とチンパンジーの大きな違いは、社会的な関係のところ。言語というのは、社会的関係が基盤になって出てくる。渡すとか見せるとか指差しなどの身振りや人と関わるというのが言語のコミュニケーションの基礎です。

スライド3をご覧ください。

例えば「バス」と言葉を聞いた時に、皆さんは、甲南女子大学のスクールバスを思い浮かべたり、市バスを思い浮かべたりします。現在、知覚しているもので、そこにはないものと呼び起こすという、意味するものと意味されるものの関係ができてくるのが象徴機能の発達です。言葉の発達の基盤は象徴機能の発達です。また、言葉だけでなく表現、例えば、絵で表現する、遊びの中で積木で何かを作って表現することも象徴機能の発達によりできるようになります。象徴機能を発達させていくのは、人との関係と物についての知識です。物の世界や人の世界の環境の設定をするのは大人の役割です。表現ということ考えた場合に、言葉での表現だけではなくて、例えば、絵での表現もあるでしょうし、音楽での表現もあるでしょうし、身体での表現もあるでしょう。感情を鬱積させてしまうのではなくて、何かを通して自分の気持ちを表現する。その時に、他者が関わって、他者にそれを伝えていく。他者はそれを聞いてあげるとということが大事ではないかと思えます。



スライド3 象徴機能（現在知覚しているものでそこにはないものと呼び起こし、その代用をする働き）

次に語彙の獲得についてお話します。スライド4に示したように子どもは物の名前、名詞から獲得します。

日本語はオノマトペが多い言語なので、養育者は「ワンワン」とか「ブーブー」などのオノマトペで話しかけ、且つ子どもたちはそういう言葉を最初に獲得していきます。オノマトペは同じ音の繰り返しなどの特徴をもち、リズムカルで、また、「ワンワン」とか「ニャーニャー」は、そのものの一部に含まれていますから、獲得がしやすいといわれています。

スライド4 語彙の獲得

言葉を育てる養育環境として大事なのは、子

どもが注意を向けている、関心を持っていることについて話しかけてあげることが子どものことばの発達にとっては一番大事です。このことはもう少し年齢が上の子どもにもいえます。大人が自分が関心があることに子どもをひっぱるのではなく、その子どもがもっている関心にこちらが添って、それを言語化してあげることが大切です。

最後に、言葉を育てる養育者、保育者の役割についてあげておきます。保育者、養育者はコミュニケーションの足場づくりをすることが大事です。子どもの反応を受け止めて返してあげる。子どもが関わりを持ちたいという相手になる。子どもの自発性を重んじる。一人ひとりの子どもの思い受け止める。それから子どもがいきいきとイメージを膨らませて遊べる場所を設定する。発達に応じたものの世界を準備する。子どもの言語発達に応じた言葉がけをしてあげることが大事です。養育者の役割、保育者の役割というのは非常に重大なものであると思います。だから皆さんもがんばってよい保育者になってください。

以上です。

一色：小椋先生、どうもありがとうございました。非常に解りやすく、きちんと発達心理学的な視点をコメントしていただきました。ここからは山根先生、小椋先生のお話を更に深めていきたいと思います。山根先生、やはり地域社会の崩壊というようなそのあたりが言葉の問題に影を落としているのではないか。それをご自分で、いろいろなところでやっていきたいというお話でした。具体的にもう少しどんな地域でこんなことをしたいということをお話いただけますか。

山根：私は、できれば半田みたいなモデル地域を全国津々浦々に作りたいと思っています。あと20年ぐらいかかるとしています。80歳過ぎまでがんばろうと思っています。とりあえず、今、7月から始めようと思っているのが、気仙沼に大島というところがあって、気仙沼は震災で被害をうけたところですが、復興支援という意味も込めて、ここで半田方式を広めたいと思っています。水上不二というもう亡くなった詩人が、この大島出身なのです。

半田市は新見南吉が命で新見南吉が一番だと思っていますし、気仙沼の大島の人たちは、大島出身の水上不二が日本で最高の詩人だと思っていますのです。確かにすばらしい、いい詩をたくさん書いている人ですが、今度は大島小学校に7月から何度か通って、いわしの会という朗読の会がありまして、その大人のグループの皆さん10人前後と、大島の場合は、5年生6年生全部併せて20人が一緒に朗読を勉強します。10月の発表会に向けて、半田と同じような勉強会を重ねていこうと思っています。

やはり行く先々でその土地で生まれた作家、詩人、そういう人の作品を読んでいくのは、とても意味があると思うのです。つまり、その作品が生まれた風土を、皆が共有しているわけです。その海の匂いを嗅いでこの詩が生まれたとか、この風があるからこのような表現が生まれるのだという風土との結びつきとかその土地の歴史とかが全部学べる。そのことによって、その子どもたちがその土地に生まれたという意味を理解し、人間としての誇りを持つきっかけになると思うのです。自分の生まれた土地に誇りが持てるということは、とても幸せなことで、非常に自分のアイデンティティを確立する上で大事なこ

とではないかと思っております。できるだけ大人の人たちをお願いをするのです。子どもたちの前で大人同士きちんと会話をして、聞かせてください。そして目上の人には、敬語を使って話してください、喧嘩もしてください。そしていろいろな大人の言葉のやりとりを聞く中で、そのことが子どもの言葉を育てる意味を持つわけで、地域の人々が皆、子どもの言葉を育てるという意識を持ってほしい。

アフリカには、一人の子どもを育てるには村中の力がいるという諺があるそうです。日本でも昔からそういう類のことはたくさんあったはずなのに、今、あまりにも個人主義的な生き方が続いてきて、その部分を見失っている。もう一度村全体で、子どもを育てていこうという意識を持ってもらうように活動していきたいと思っています。

一色：ありがとうございます。

小椋先生、山根先生が、子どもの言葉を育てるということで、先ほどのお話の中で、自分の気持ちを言葉で表現する。相手の言葉を聞くことによりコミュニケーションをできるようになる。何とか、自分が何かの思い、志を相手に伝えることにより、世の中が変わってくるというお話がありました。そういったところを例えば就学前の小さな子どもたち、家庭と小学校以降というところを置いて、就学前の幼稚園と保育園でもやはり、話し言葉は大事だと思うのですが、その辺り、何かコメントはございますか。

小椋：子どもの話したいという気持ちを大事にしてあげる。だから、言葉だけではなくて、表情とか仕草にもでていくかと思いますが、そういう非言語も含めてこちらが聞くという姿勢、子どもが話していることを頷いて聞いてあげ、また、話を引き出していくことが大事だと思います。

それから言葉で表現しにくい子どもの場合は、一つは他の表現手段、絵とか遊びなどで子どもが何を表現しているかをこちらが読み取ってあげるとするのが大事だと思います。そして、子どもは自分のことを分かってもらったと思ったら、また表現してくるでしょうし、そして言葉でそれを言語化することができるようになると思います。だから、言語化が難しい子どももいますし、そういう時には、それを引き出すような関わりとか媒介物、例えば、粘土や砂でもいいですし、子どもの気持ちが表現できるようなものをこちらが用意する。一番は、やはり聞いてあげる、その子どもの気持ちを読み取ってあげるとするのが大事であると思います。

一色：それと先生がおっしゃった言葉の持つ情動的なものと論理的なものといつ頃からどのように子どもたちの言葉として話言葉も含めて、両方をうまくミックスしていくことの必要性についてお聞かせください。

小椋：言葉というのは、論理的なものがかかなり効いてきますので、やはり言葉で表現できるということは、小さい子どもでもある程度論理的なものが関わってきています。また、遊びとか行動では、感情とか情動の部分が多いと思います。言葉であらわすことは情動の表出の部分と論理の部分の両方が関係してきています。

一色：山根先生は、本の中で大切なのは、言葉のセンスとおっしゃっていました。そのセンスというのは、どういうことでしょうか。

山根：言語感覚というのはもともとその人らしい、その人の個性が表れる部分で、例えばあかちゃんにお乳をあげるというのが嫌だという世代とミルクを与えとか、昔はやると言っていました。昔、朝の番組で一緒に司会をしていた男性アナウンサーは子どもが生まれたばかりだったので、放送の中で「朝、赤ちゃんにおっぱいをあげてきた」と言うと、身内に敬語を遣うのは何事だと午前中に500本ぐらい抗議の電話がきましたよ。

時代とともに動いていく言語感覚ですが、そういう感覚は大事にした方がいいと思います。ちょっとした違和感とかがそういうところにその人の個性が表れてくるわけで、そういう細かいニュアンスを押し殺していくと、大きな大切なものを見失っていくようなところもあると思います。

先ほどおっしゃっていた、聞くということが大事だということですが、今の時代は、本当にこの「聞く」ということが今までにも増して、大事な時代になっていると思います。というのは、今は殆ど、日本中が一人カラオケ状態です。表現をしたい人ばかりです。自分が言いたい。自分が表現したい。となりで他の人が表現していることを聞こうとしない。それがやはり人を孤独にしている。お互いが、相手の言っていることを聞いて、自分もまたそれに応じて返すというのではなくて、皆10人並んで、全員が1人で表現しているような感じがあります。お互いが話合うという時代から、聞き合うという時代にしていかないと、人の心の孤独とかささんだ状態を回復していくことができないのではないかと思います。

最近、歳を取ってくると、段々と子どもの頃のことをありありと思い出すことがあります。まだ3歳ぐらいの時に、私の家に女性のお客さんが来られました。母が畳の部屋に座って、その下に土間があって、お客様は土間に立って、座っている母に挨拶をせっせとしました。その前に風呂敷包みがあって、母が「そんなお心遣いなく、結構ですよ」というようなことを言っていました。私は母の肩に手をかけて、その話を聞きながらその風呂敷包みを足でずずっとお客様の方に押し戻したのです。母はお客様がお帰りになった後、「行儀が悪い」「人様からいただいたものを足で蹴るのか」とこっぴどく叱られました。その時、私はなぜ、そんなことやったのか、今でも鮮明に憶えているのですが、母が「そんなことをなさなくて結構です」と言っているのを聞いて、自分では言葉で言えないから、足で表したのです。足で、「結構です」「こんなお気遣いなさらないで下さい」というような気持ちを伝えようとしたんですね、3歳なりに。でも母に説明することができなかった。もし、母が後でなぜあんなことをしたのと優しく聞いてくれれば、私は何とかそのようなことを言ったかもしれない。大人は3歳の子どもの、そんなことを考えているなんて思ってもみない。なんと行儀が悪いことをするのかとしか見ないわけです。でも、3歳は3歳なりに心の中でいろいろとあって、大人と同じようなことを考えているのです。子どもの言葉を育てる活動に入って、今思い出すと、私はあの時3歳だけれども、そんなことを考えていたのだ。やはり子どもの言葉を育てる時、まず、聞くことから始めないといけないと感じたのです。たぶん、今の幼い子どもたちもきっと心の中で大人と同じように一人前に考えているのだと思います。

小椋：まずは言う前に聞くということですね。言葉を言い始める前は、理解する。子どもは、言われていることを聞いている。子どもの言葉の発達でも、「言う」と「わかる（理解する）」では、理解するほうが先に可能になります。先の山根先生のお話で、お母さんが「そんなお心遣いなく、結構ですよ」と言われたのは、本当は頂きたいけれども結構ですという大人の二面性があらわれていると思います。子どもは大人がいった言葉の裏の意味まで考えませんので、動作で「結構です」ということをありのままに表現したわけです。子どもの心を理解して、頭ごなしに怒るのではなくて、なぜ、その行動が起こったのかというのをやはり親とか保育者は考えなくてははいけません。

一色：では、学生の方でお2人の先生に質問やコメントがありますか。

学生A：私は、今年幼稚園実習に行くのですが、その子どもに合った言葉がけというのは、その子に合っている言葉をどう選んだらいいのかが分からなくて、自分は正しい声かけをしているつもりでも、その子どもはこういう性格だから、違う言葉がけがあるという判断がまだ分かりません。そういう時はどう判断されていますか。

小椋：無理に自分で喋りかけようとするのではなくて、子どもがやっていることを見てこちらが声をかける。こちらから無理に声をかけようというのではなくて、子どもがやっていることをこちらが言葉で言ってあげるというのでいいと思います。だから、無理にやらなくてはと思うと大変になります。だから、絵本などは子どもが喜ぶますから、それを一緒に読んであげるなどいいと思います。

山根：無理に何か話かけなくてはいけないと思うと緊張しますね。私も新参者ですから、初めて子どもと関わる時には、緊張をしました。でも、先生がおっしゃるように、一緒に子どもと並んで、肩に手をかけるとか、触れ合いながら、その子どもが興味を持っているものについて一緒に語る。これは、私が長い間旅番組をしていましたが、その時に一般の人にインタビューするのと変わらない気がします。これは、どうお考えでしょうかなどと正面から質問形で聞くと、相手が引いてしまいます。

小椋：すると自然に子どもの方から話かけてくるし、子どもの方からよってくると思います。最初はちょっと眺めているというか、あまりその子の世界にこちらが入ると子どもは嫌だと思うので引いてしまいます。並んで見ている、寄り添ってあげるのがいいと思います。

一色：では、時間となりましたので、第一部を終了いたします。

< 休憩 >

一色：第二部を始めたいと思います。ここはディスカッションで進めたいと思います。では、何かご質問、コメントなどはございませんでしょうか。

一般A：大阪でずっと英語を教えている者です。本当に今日の雰囲気を見ていて、言葉は言霊といえますか、つまりボールというか、ぼんと投げるものだと思います。山根先生も小椋先生も200キロの新幹線にのってボールを投げられる。そうすると、そのボールは先生方にとっては、じつと優しく渡されているつもりですが、周りにいるものにとっては、200キロで飛んでくるわけです。これは、キャッチボールでは、素手では受け止められない。

一人カラオケのお話はとても腑に落ちました。結局、自分の喋っている言葉というのは、自分の思いや今までの経験をずっと重ねてきた言葉で、本当にそれが自分にとっては、本当の言葉であると思っているのですが、それは、やはり相対的に正しいわけで、客観的にみればその人にとって正しい言葉であって、今の学生にとっては、違和感のある言葉で、だから、先ほど視聴者からいろいろな苦情の電話があるとおっしゃっていましたが、それも視聴者の価値観で言葉を判断していて、本当に言葉は言霊だと感じました。そうすると、言葉を翻訳とかどう減速させるのか、どうしたらキャッチボールができるのか、それが一番言葉の扱いの上で注意しなければいけないと思いました。

山根：私は、今、聞くということが人を豊かにしてくれることだと思うのです。ラジオの番組を聴いていて、とても有名な日本でも知識人の代表といわれる方がでていらっしゃるのですが、それを聞き手の人がいるのですが、その人がとてもよく調べていて、いろいろな各地を巡る話をしています。私たちリスナーとしては、その出演者の言葉を聞きたいわけです。知識が得たいわけではないのです。知識は今、インターネットもあるし本もあるし、どうやっても調べられます。でも、折角その人が出ていて、話が聞けるというのは、その人格を通して世の中がどう見えているのか、そのことを聞きたいと思っている。でも、聞き手の方が調べてきたことをすべて網羅してずっと話しているのです。それを聞いていると、聞こうとする姿勢そのものが知性であるという気がします。私が調べて知っていることを全部吐き出すのは、一人カラオケです。それは、全然心を満たさない。知識欲を満たされるとそれは満足感がありますが、知らないことを初めて知って、それが深いことで、自分の思考に繋がればある種幸福感があるけれども、どこの町の人口は何人で、何の産業が盛んでなどは、インターネットでわかることです。それよりもその方の話が聞きたいという時に聞かないというのは、もったいないと思いました。そういった、人の言葉に対する敬意、人の言葉を聞こうとする姿勢、そういう謙虚さを失っているのかもしれない。人の言葉に謙虚に耳を傾けるという姿勢そのものを失ってきているのだと感じます。

私は職業柄、聞くのが仕事で、とても幸せなことで、いいお話をしてくれる人たちに会ったので、聞く幸せというのを体験しました。聞くことの幸せを知らない人が多いのではないかと思います。それは

こちらの、喋る側が、聞いていただけるほどの話をしていないというのがあるのですが、今の日本の中でこれだけ皆が孤独感に陥っていくという根本に、聞き合うようなお互いの謙虚さが失われていることがあるのではないかと思います。

一色:今のお話でいうと、一人カラオケの人がたくさんいる。これはどうしてそういう社会になってきてしまったのでしょうか。私も考えるのですが、学生たちも皆、授業中も含めてスマートフォンでさっさとやっている。これは、スマートフォンでやっていて、授業の中で先生や学生がコメントしているのを本当に聞いてはいないと思います。そういうことは、新しいカラオケであったり、スマートフォンであったりipadであったり、そんなものがあるが故にそうなったのでしょうか。それとも、そうではなくて、人間の方が自ら、そういうものを欲して今の時代になっているのかどうなのでしょう。皆さんはどうお考えになりますか。今日のテーマはそういう部分でない、人とはこういうものなのだという一つの考えが山根先生の中であって、それで、言葉というのが非常に重要だというお話でした。その辺り、いかがですか。

一般B:一人カラオケについてよりも、今、コンビニエンスストアがあります。昔だったら八百屋とか肉屋さんについて、「これを何グラム」とか言って、会話がありました。でも今は商品を持ってレジに行って、お互いに無言で済むわけです。コミュニケーションというか言葉なしで済む。だから先ほどの一人カラオケも別にコミュニケーションをしなくても自分で満足して、自分で時間を費やしてストレス発散して満足できる。人のストレス発散まで付き合う必要がない。我々が若い現役の時は、一杯飲みに行こうということもありましたが、今は本当の仲のいい話の合う、上司の話は聞きたくないとか部下から突き上げられるもの嫌だとか、昔だったらお互いに言い訳を聞き合うという機会もありましたが、今はコミュニケーションを図ること自体がうっとうしい。これは、神戸の大震災があって、電気が消えて、家族が一つの部屋に集まって、これから皆助け合っていこうと盛り上がり、親父はこれから家族で話をする機会ができるのではないかと内心喜んでいる間に、電気がついたら、皆自分の部屋に帰って、部屋から出てこない。こんなこともあったので、一人カラオケというのは、今の風潮で分かるような気がします。

一般C:今日のご講演ありがとうございました。私は実は広汎性発達障害なのです。発達障害が分かるまで、どこの病院に行っても未診断でした。2001年に精神遅滞と診断されたのですが、それでも分からなかったのです。発達障害が分かるまで、私は勉強していたり真面目にやっているのにふざけているとかさぼっていると言われてたり、就職もできなかったのです。「なぜ就職しないのか」「就職する気はあるのか」と言われたりと、中々分かってくれなかった。仕事をしようと思って動いても障害にかかっているの、社会は雇用率を2%上げたというけれども採用もしてくれませんかし、就職は無理だと言われていました。就労事業のところに行くかデイケアしかありません。今それで悩んでいます。

山根：私の姪っ子も発達障害です。料理が好きなので、料理学校を出て調理の仕事をしています。発達障害についての認識は社会的に広がってきています。いろいろな形の症状があるとか人とのコミュニケーションも難しくてらっしゃるところがありますね。私も番組で自閉症スペクトラム症候群の番組のナレーションをしたのですが、他の人にどういう言葉を言うと、人が傷つくのかというのが、中々理解しにくいところがあるようです。そういうのを一つひとつ学習して、彼のノートを見ると、「くだらないは禁句」と書いてあるのです。そういうのをきちんと気づいて心がけていかないと、社会でコミュニケーションをとっていくのは難しい症状なのだとな周りにそれで理解ができるのです。だから、そうやって少しずつご自分で周りとは何とか大きな摩擦にならないようなことを日々考えていくのは大変かもしれませんが、それによって随分変わっていくのではないのでしょうか。

私も国の政治をどうするとか、雇用をどうするとかというのは、何の力もありませんし、建設的なことは言えませんが、ただ、今、社会的にそういうことの理解が深まり始めているということは知っておいてください。

初めて1歳半検診を始めたのは佐賀県だと聞いたのですが、そういう方たちに対して、そういう早い時期からそういうコミュニケーションのハウツーを伝えたいというのがあったようです。今、どうすればという解決策は分かりませんが、少しずつ世の中は前には進んでいると信じましょう。

少し周囲に理解してもらえる人を求めていかないといけませんね。でも、あなたのようにコミュニケーションを苦勞しているからこそ、何か役に立てる場面もあるはずですよ。

一般C：作業所に行ったのですが、そこで職員の人との意見の対立と障害者の仲間の人と喧嘩をしたことでそういうところに行くのが嫌なのです。それで、できるだけ普通のところで働きたいのですが、親は反対しているし、就職は無理だから、ボランティアでお年寄りのお世話をしています。それをずっとやりなさいと言われてます。ですが、子どもに関わる仕事がしたいのです。

小椋：では、そのためにはどうしたらいいのかを考えて、例えば、保育士の資格をとるなどして、自分の希望を実現していくために、自分で目標を作ってやっていくのがいいと思います。保育士養成も大学だけでなく、いろいろな講習などもあります。保育士と教員免許は違いますから、子どもに関わる仕事だったら教員免許を持っていればいろいろできると思います。一人で孤立してしまうとなかなか難しいですから、そういうことが可能になるようなところにアクセスしていくのがまずは大事だと思います。デイケアにはトラウマがあって嫌なのであれば、そうではないところもあります。それがすべてではありませんから。この大学にはそういうサークルはないのですか。

一色：それはありません。臨床心理はありますので、発達障害の部分はどうしたらいいのか、それは、例えば神戸市とかそれぞれの市にありますので、そういうところを通して、ご自分自身も

どうしたらいいのかというのを探していくということが必要だと思います。ですから、最初に言われたような、発達障害ということを知らないで、誰かが何かを言うってしまうというのは、けしからんことで、今や世の中として、発達障害の方々もたくさんいらっしゃいますし、いろいろなことができるということが見えてきているわけですから、そういったところで、ご自身で具体的に何をというところで探していくということではないかと思います。

一般C：ありがとうございました。

一色：では、他の方でございますか。

一般D：今日はどうもありがとうございました。私は数年前に山根先生のお話を神戸で伺いました。その時にとても感激しまして、もう一度聞いてみたいと思っていたので、今日、一色先生からご案内をいただいて、喜んで参りました。

先ほどの一人カラオケの件ですが、私は、人と話をする時は、人の話を聞くのは7割、自分で話をするのは3割と聞いていたのですが、今は逆転しています。私が一番思いますのは、昔は、私たちの学生の頃は何か一つの知識を得るのに、辞書を調べたり、本を調べたり、本屋に行って本を調べることから始まって、それでもなければ図書館に行って、それでも解らなかつたら今度は先生に何うというように時間をかけて、一生懸命自分の頭で考えながら選ぶことも考えながら、ようやく一つの知識を得られました。ところが今はボタン一つで、膨大な知識を一気に得ることができます。ですから、たくさんの知識を得たら、それを出したがる傾向にあるのではないかと思います。インプットしたものをとにかく人に聞きたい。昔だったら一つのことを得るには、とても努力がいて、時間もかかりました。だから、一つのことをゆっくりとあの人に伝えたいという思いをゆっくりと伝えて、相手もゆっくりとそれを聞いて、咀嚼してそれを聞いたと思うのですが、そういうスローテンポの時間がなくなってきて、皆、即知りたい、即伝えたいというのがあまりにも強すぎて、やはり相手のことを考えずに自分を出すことばかりになるという社会になってきたので、それも一つの一人カラオケの理由かなと思いました。

一つには、NHKでもそうなのですが、喋るのが早くなった。聞き取れないことが多いです。私は最近、NHKのアナウンサーの質が落ちていると思うのは、時間に追われるのは解るのですが、時間内に言うべきことを言わないといけないという思いが先にあって、それを伝えるというよりも、出すことを先に考えているのではないかと思うのです。ですから、ベテランのアナウンサーの方のアナウンスを聞くと、ほっとします。やはり聞き取りやすい、スピードも丁度で、ピッチも丁度、音量も丁度いいし、長く聞いていても疲れませんが、今の若い特に女性のアナウンサーは、音が高くて、鼻がかかった言葉で早く喋るので、聞き取れないのです。だから本当に視聴者のことを考えているのか、誰に向かって話をしているのかという気が頻繁にします。民放ならお金を払っていませんが、NHKは公共放送で、昔は一つの言葉でもNHKのアナウンサーが言っていたから絶対これは正しいと言えました。ところが今は言えなくなったというのが残念で、それだけ言葉が衰退してきているというか、文化である言葉がどんどん

と衰退してきていて、それがとても残念で、つまりは、日本の文化がどんどん衰退してきている。だから美しく、正しい言葉をもう少し広めていただきたいと思います。

山根：申し訳ございませんとしか言えませんが、やはりアナウンサー特に公共放送を担うアナウンサーは、きちんと技術を持つ、読むこと、聞くこと、中継することそういう技術を持つのは当然なのです。技術を持っているから信頼を得られるわけで、技術を持つのは、最低限の条件です。でも、うまく読めるだけのアナウンサーでいいかというのと、そうではなくて、放送人として今、放送で何を伝えるべきなのか、今、世の中がどういう動きでこれに対してどういうスタンスを持つべきなのかとか、どういう放送をだすべきかという志に支えられた技術というのが、私の室長時代に、言い続けたことです。全国 500 人いますが、経営的には、「スターを作れ」と言われるのです。要するに、そういう目立つスターがいると受信料もいただきやすくなるということもあるようでした。でも NHK というのは、全国 500 人、どこの誰が読んでも、きちんと人に伝わる読み方ができて、司会ができて、中継ができる。そういう 500 人が揃っていることによって、NHK の信頼が保たれると思っていましたね。皆、研修は一生懸命やっています。1 年目研修、2 年目研修、災害研修、報道研修と常にアナウンサーの研修はしているのですが、最近、英語も喋らないといけない。顔も美人でないといけないなど、他の条件がでてくると、中々全部揃わなくなってしまっています。

でも、おっしゃることは当然ですし、NHK のアナウンサーは皆、そのように心得てはいます。たまたま資質とか努力が足りなかつたりすることもあり、申し訳ございません。

一色：では、他にいらっしゃいますか。

一般 E：今日は貴重なお話をありがとうございました。山根先生に質問なのですが、地域社会のつながりを取り戻すことが必要ということでしたが、私もそう思うのですが、先生がご自分の地元、身近な地域で何か取り組まれていることはありますか。と言いますのは、子どもの学校の PTA の本部役員をしております、それをすると地域の会合に出席するという役もついてくるのです。今年度から役員になりましたので、会合は今月末が初めてなのですが、地域の会合というのは、自治会とか婦人会とか、中学校の PTA の役員などなのですが、何かそういう中でできることはなのかと今日のお話を伺って思いました。

山根：痛いところを突かれています。というのは、本当にあちらこちらに出かけて、出先でいろいろしているのですが、足元で、私は今のところに住んで 30 年近くなりますが、ずっとサラリーマンで留守にしていたので、6 丁目の自治体の集合には一度も出たことがないのです。今、私は老夫婦でいるのですが、この先、どうなるのだろう、本当に地元できちんと地域の人と関わっていかないとだめだと思っているのですが、今更突然出て行くのもという感じで。前の家の方に挨拶

拶しても、会釈程度で殆ど挨拶をしないまま、そのご夫婦があつという間に亡くなられてしまいました。前の家は空き屋になりました。今は、ご近所4軒あるのですが、ご挨拶はしますが、いざという時に助けあえる相手がいるかというとても不安です。これから老後を迎えるに当たって考えていかなければいけない、都会の真ん中で人とのつながりを作っていないといけないと思っています。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般F：小椋先生にお伺いしたいのですが、先生のお話の中で、小さい子どもの言葉の発達の理論の中で能記と所記というような概念が出てきました。そういう能記と所記のようなお話を大学の学生にお話になるのは、今日のような短い時間で学生さんは理解できるのでしょうか。30分ぐらいかけられるのでしょうか。その辺りお聞かせ願いますか。

私は、後期高齢者になっていますが、小椋先生のお話を聞きに伺えるところがあるようでしたら、それも教えていただけますでしょうか。

小椋：能記と所記のところは例えば見立て遊びなど子どもの遊びの実際の例を出しながら説明しますが、「言葉の発達の基盤の能力」の1回の講義の中にいれているので、そんなに時間をかけて喋ってはおりません。どれだけ学生が理解してくれているのかは、非常に心下ないですが、言葉の基本なので、やはり、あの図を出すようにしています。言葉だけではなくて、例えば言葉がない子どもの場合には、遊びで意味するものと意味されるものの関係がどれぐらいできているかによって、言葉の発達のどこがどういう原因で遅れているか見ていくのが一つのポイントになるので、講義の中で能記と所記の話をしします。講義を聞かない学生もいるので、未来を担っていく子どもを育てる仕事につこうとしている人たちに、どのようにしたら講義を聞いてもらい、大事なことを伝えていけるかが、今の私の一番の悩みです。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般F：今日はありがとうございました。言葉の力ということでお話をしていただきましたが、とてもその通りだと思いました。コミュニケーションの中で言葉が生まれてきたのは、家族の起源のほうが言葉よりずっと前だというお話を聞いていると、言葉だけでは伝わらないもの、とてもきれいな言葉でお話いただいても、あまり届かないことがあったりとか、たどたどしい言葉で話されていてもとても心に響くことがあったりというのが、自分の経験でもありまして、それも含めて言葉の力なのかもしれませんが、言葉というその周辺も含めた伝わるものに対するお考えをお聞きできればと思いました。

山根：私はたまたまアナウンサーという職業で36年過ごしたので、言葉ということをこれだけ人間の生きていく上で大切なものとしてピックアップしているわけですが、先ほど申し上げた太田亮先生は、言葉で表現できない人たちのことも考えて教育があるべきだとおっしゃっています。それはとても解ります。言葉になる前に人間の身体の中に思いというものがあって、それを何らかの形で伝えようとして、その最も端的に、多くの人が伝えられるのが言葉という形ですが、言葉では表現できないけれども、身体の動作や表情とか声とかで、いろいろな表現をしている人はたくさんいて、教育する側は、そういうものをきちんと理解して、受け止めていくべきだと、できるかどうかは別として、よく理解しているつもりではおります。

言葉にあまり偏り過ぎると、言葉には限界もありますし、言葉だけですべてが表現できるわけでは無い。ただ、私の立場として、今は、36年間、職業の中で蓄積したものを、社会還元というかお伝えするのを、私のライフワークとして考えているということであって、言葉だけがすべてだとは思っていません。ただ、言葉はとても大切なものだと思っています。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般 G：山根先生、素敵な声をありがとうございます。生で先生の声を聞くとさすがなだと思えました。

先生がいつか新聞のコラムで紹介されていた本を持ってきたのです。アン・カープさんの『『声』の秘密』という本で、私も声に興味があったので、読んでみたのですが、とても面白い本で、声が人間関係を支配するというので、先生の声を聞くと、そんな感じがいたしました。

小椋先生に伺いたいのですが、私は声に興味があるのは、言葉になる前の子どもたちに関心があるので、今日、先生がおっしゃった、社会的な認知と物理的世界の認知の参考関係のできる時の子どもたち、2歳ぐらまでの子どもたちに興味があります。2歳児を見ていると、先生がレジュメで書いていらっしゃる模倣とかふりとか身振りとか言葉にならない時にそれで表現します。特に模倣なのですが、子どもたちが模倣する時はどんな時なのか。たぶん、とても興味があって、とても好きな人しか模倣しない。全部を模倣するわけではないと思うのです。その模倣の起こる時はどんな時なのか模倣と情動的な関係は、喜びとかが2歳の中で結びついているのではないかと思うのですが、そういうことについて書いている研究書とか本があれば教えていただきたいのです。

小椋：模倣は動作模倣（身体模倣）、音声の模倣、物を使った模倣といろいろな種類がありますが、モデルは、やはりお母さんとか保育士さんとか自分と情動的な関係ができていて人の行動を模倣します。例えば、実験に行くと、実験者がモデルを提示しても子どもは模倣しないことが多いです。保育所などは、毎日手遊びなどをしますが、そういうのを取り入れて、初めは見ていただけとか、少し身体が動くだけで、段々と真似ていきます。言葉は、音声の模倣が一番関係していると思います。子どもは大人がいった音声を真似します。模倣は、ミラーニューロンが関係し

ているといわれていますので、脳科学からみた模倣の本（マルコ・イアコポーニ 2009「物まね細胞」が明かす驚きの脳科学 ミラーニューロンの発見 塩原通緒（訳） 早川書房）や、チンパンジーの模倣の本（松沢哲郎（監） 明和政子（著） 2004 霊長類から人類を読み解く なぜ「まね」をするのか 河出書房新社）もでています。チンパンジーも模倣をしますが、訓練しないで見ただけで模倣することは非常に困難であることが書かれています。また、生まれた時の新生児模倣で口を開けたら開けるというメルツォフの研究もあります。反射ではなくて、生まれながらに人間はコミュニケーションをする力を持っているといわれています。だから模倣というのはとても大事です。子どもがモデルを模倣する前に、お母さんたちは自然に子どもがやっているのを模倣しています。大人が同じことをやることによって、視線が合ってきたりします。自閉症の子どもに子どもがやっていることと同じことをやってあげる。おもちゃも2つ用意して、大人が子どもと同じことをすることにより共同注意が成立してくるという実践や研究もあります。模倣は、大変面白いテーマだと思います。モデルは、自分と情動的な関係が成立している人、大人でも尊敬している先生のことを取り入れるというのは、やはり模倣ですが、その人に対して敬愛しているとか信頼しているので取り入れるのです。小さな子どもの場合は、お母さんとか保育士とかという人の行動を取り入れます。それは甘えとか安心感から始まると思います。

一色：今日はどうもありがとうございました。今回は、子どもが育つとか子どもを育てるとかというところで、言葉の問題が非常に重要ではないかということで、山根先生、小椋先生にお話いただきました。でも、いろいろ皆さん方と議論をしていると、その子どもの環境とか時代が病んでいるとか成果主義があるとかそういう時代ですが、やはりこれは一人ひとりがそういうことをきちんと考えて、一步一步何かをしていくことが大切です。黙っていればよりもっと酷くなるかもしれません。一人ひとりがこの問題を考えていていただきたいと思います。